

聖書愛読

第1号 1964年(昭和39年)1月

前田護郎主筆

—ひとり学ぶ女に—

目次 創刊のことば・イエスの系図・創造・書斎だより

創刊のことば

ひとり聖書の本文に親しんで、いささかなりとその意味を理解し、形式的な礼拝や複雑な教義では与えられない深い救いのよろこびを体験した人の数は測り知れません。それは聖書のうちにイエスの言行、弟子たちの消息、古いヘブライの伝統などが豊かに収められていて、キリスト教成立当初の清純な福音そのものの姿に直接触れることが出来るからであります。宗教改革以来聖書が重んぜられ、今日1,000をこえる諸国語に訳されて全世界的に普及し、文字通り定冠詞つきのザ・バスト・セラーになったのは、中世的な教権からの解放の動きであり、それはイエスがユダヤ教の礼拝や教義からの解放をもたらし、彼の福音が平易なことばで伝えられた史実に直結するものであります。ことは更に古く、強大を誇ったオリエントの諸文化圏で文字は偶像を拝む特権階級の専有物であったのとはちがって、小さく貧しいヘブライの人々の間に見えざる義の神を中心とする共同体が生まれ、隣人愛の精神が民衆に近づきやすい平易な文字でしるされた旧約聖書に溯ることが出来ます。イエスがこの愛の成就のために戦って十字架に亡くなった事実とその解釈をしるすのが新約聖書であります。

戦争前夜の暗い時に福音の光に接し、同胞にも自らにも聖書を理解しやすくしたいとの希望を与えられて今日に至りました。戦争のため13年近くも外国生活をし、日本へ戻れたのは1952年の秋でした。その後2度外遊いたしました美しい大和島根の同胞とともに母国語で聖書を学びたい気持は強くなるばかりです。至らないわたくしですが、学的には世界の最高水準を目指しつつ、平信徒として、出来るだけ平易な形で恩恵のお福分けをさせていただきたいと思って筆をとりはじめます。“全き知識には及ばぬわれらのこと、たとえ少なすぎても何かいう方が何もいわぬよりはよかろう”というヒエロニムスのことばはまたわたくしの心境でもあります。

マタイ福音書

1. イエスの系図 1:1-17 (ルカ 3:23-38)

1 アブラハムの子ダビデの子イエス・キリストの系図。2 アブラハムはイサクの父、イサクはヤコブの父、ヤコブはユダとその兄弟らの父、3 ユダはタマルによるパレスとザラの父、パレスはエスロンの父、エスロンはアラムの父、4 アラムはアミナダブの父、アミナダブはナアソンの父、ナアソンはサルモンの父、5 サルモンはラハブによるボアズの父、ボアズはルツによるオベデの父、オベデはエッサイの父、6 エッサイはダビデ王の父であった。ダビデはウリヤの妻によるソロモンの父、7 ソロモンはレハベアムの父、レハベアムはアビヤの父、アビヤはアサの父、8 アサはヨサパテの父、ヨサパテはヨラムの父、ヨラムはウジヤの父、9 ウジヤはヨタムの父、ヨタムはアハズの父、アハズはヒゼキヤの父、10 ヒゼキヤはマナセの父、マナセはアモンの父、11 アモンはヨシヤの父、ヨシヤはバビロン追放のころエコニヤとその兄弟らの父となった。12 バビロン追放ののち、エコニヤはサラテルの父、サラテルはゾロバベルの父、ゾロバベルはアビウデの父、13 アビウデはエリヤキムの父、エリヤキムはアゾルの父、14 アゾルはサドクの父、サドクはアキムの父、アキムはエリウデの父、15 エリウデはエレアザルの父、エレアザルはマタンの父、マタンはヤコブの父、16 ヤコブはマリヤの夫ヨセフの父であり、彼女からキリストといわれるイエスがお生まれになった。

17 すなわち代をあわせるとアブラハムからダビデまで14代、ダビデからバビロン追放まで14代、そしてバビロン追放からキリストまで14代である。

1. アブラハム (創世12章以下) 信仰の人 (同15:6, ロマ4:9以下, ガラ3:6以下, ヘブ11:8) イスラエルの誇り (マタ3:9, IIコリ11:22)。ダビデ 紀元前1000年頃イスラエルを繁栄に導いた英君, 多くの詩篇の作者。イエス・キリスト キリスト (ギリシア語) メシア (ヘブライ語) 油そそがれたものであるところの (16節) ナザレのイエス, 系図 (創世5:1) (イエスの) 伝記全

体とも取れるが, 同じ genesis の語 (由来, 起源, 出生で創世記のギリシア名) が18節にも出るから系図 (1-17節) と解するのがよい。

6. ダビデにだけ王の語がつくに注意 (後述) 7. バビロン追放 前6世紀初にエルサレムの指導者がメソポタミアに追放された事件 (列王下24:10以下)

福音書のはじめに系図が出るが, 系図は旧約にも多く出 (ルツ4:18以下; 歴代上1-9章など) 史家ヨセフスもラビの文献にも度々あらわれる。パウロがアブラハムの末 (ロマ11:1; IIコリ11:22) といっておの攻撃に対して自ら守ったのも家系を重ねた当時の模様を反映する。マタイが系図を福音書のはじめに置いたのは, イスラエルの伝統を尊重する彼の立場のあらわれである。系図に並んだ名前は大体ヘブライ語聖書でなくて LXX (ギリシア訳旧約) によるが, 当時は LXX が広く用いられており, LXX の中には現在ヘブライ語聖書よりもよいテキストがあり, 福音書もギリシア語で書かれているからマタイがイスラエルのことと矛盾しない。

系図は I イスラエルの祖アブラハムから英君ダビデ王までの上昇 (2-6節), II それからバビロン追放の悲劇に至る下降 (6-11節), III 更にキリストに至る新しい上昇 (12-17節) という三段階があり, キリストの系図にふさわしい堂々たる形をそなえている。ダビデに王の語がついてソロモンにつかないのもダビデが再来して数い主になるという予言 (イザ9:6以下など) にこたえてイエスこそダビデの子 (マタ9:27; 15:22; 20:30など) で真の主 (同2:2など) という福音書の伏線と見得る。ここにアブラハム-ダビデ王-バビロン追放が強調されるのは系図の名前が人物崇拝を示さず, 歴史にあらわれる聖意を示す。

14代づつに分けられるのは主の祈りの数 (6:9-13) たとえ話し集 (13章) パリサイ人のわざわいの数 (23章) に示されるようにマタイの好んだ7の数 (他に七曜, 七福等にも例がある) の2倍であること, あるいはヘブライ語の David が子音だけの DVD で書かれた場合それは D=4, V=6, D=4 合計14の数値を示すゲマトリア (黙示13:18で666が皇帝ネロを指すように数でものを示す古代の表現法) からも説明出来る。この14代が3段階重ねられるのは3というよい

数がマタイによっても荒野の試みの数 4:1-11, 真の義の例証 6:1-18, 癒しの並列 8:1-18などのように用いられたと見得る。厳密に言えば系図の12-16節に13代しかないのは、ヘブライ語で伝えられた段階に於いてヨアキムとエコニアとが似ているので脱落したとも見られるが、エコニヤを11節と12節と二度に数えれば14代目にキリストとなるから大して問題ない。

女性の名が挙げるのはユダヤの系図では珍しい。一つにはマリヤという女性が急に現れるのを避けるためと見られるが、それならばアブラハムの妻サラやイサクの妻レベカ、ヤコブの妻ラケルの如き代表的婦人が挙げられるべきである。ここに異邦の女ルツや遊女ラハブを挙げたことは系図の人間性と、マリヤが異邦人のガリラヤ(マタ4:15)出身で傍系的存在であったのを弁護するためでもあろう。

16節で急に文体が変わってヨセフとマリヤの関係が出る。異本を見るとシナイで発見されたシリア語写本に、「ヤコブはヨセフの父、ヨセフは処女マリヤの許嫁で、キリストといわれるイエスの父」とあり、古ラテンその他には「ヤコブはヨセフの父、彼の許嫁処女マリヤはキリストといわれるイエスを彼に生んだ」とある。これらの示す通り、処女からイエスが生れたという信仰と、ヨセフが彼の父であるということとの雲肉両面が問題となってテキストにあらわれているのである。ヨセフとイエスと全く無関係ならばこの系図全体が無意味となるが、それならば処女マリヤから生れたということはどうなるか。詳しくは次の18節以下の研究で述べよう。

更に問題がある。イエスは祭司でなかったが自ら血を流して犠牲となり、神と人の間を整えた真の大祭司となり、メルキセデク以上であったというヘブライ書に、「父なく母なく系図なく」(7:3)とある。これはユダヤ教でアロンの後継者決定のようなこと(民数20:22以下)が形式化して血統さえあれば祭司の資格ありとするのに対する批判である。系図が不明で除名された祭司もあった(エズラ2:62)。同じヘブライ書(7:14)がイエスが僧族系のレビ族でなくて王族系のユダ族出身でありダビデの末であることを強調するのと精神を同じくするものであって、祭司中心のユダヤ教の徹底的な批判の一環として、祭司的な意味では「父なく母なく系図なき」イエスこそ真の大祭司という主張である。同様に、ユ

ダヤ教的な系図の尊重を戒めることばが教会書簡にもあらわれる(1テモ1:4 テト3:9)。パウロがイスラエルの血統を持ちパリサイ人として律法を守ったことを人間的な意味で誇ったのち、これらのことはキリスト・イエスを知るといいうすぐれたことのために棄つるの如く思う(ピリ3:5以下)といったのも系図を問題にしなかったからである。イエス自身も、ダビデの子であること以上の次元におられたのである(マタ22:41以下)。ダビデの子であり、系図があるからイエスが神の子というのではない。罪あるものために苦しみ、十字架について奴隷の姿で命をなくされた彼こそ神の子である。このことを信するものには、ユダヤ教に対して彼の権威を説明するために冒頭に系図を掲げてイエスこそダビデの子であり真の王であるとしたマタイの意図も理解されよう。

聖書の思想 I

創造(七)

創世	1-3
ヨブ	38
詩篇	104
イザ	42:5 以下

およそ事物を明らかにしようとする際にその起源や由来をたずねるのは当然であり、人を紹介するにも生れや経歴が基礎となる。幼児にとっても自らが何処から来たかは大きな関心事である。未開民族も団結のために先祖からの伝説を重んじ祭りの際にそれを朗誦するなど民俗学や文化人類学の示す如くである。ニュージーランドとその附近のマオリ Maori 族が伝える物語りで、創造神イオ Io によって闇から光が作られ、雲が愛の音信を運ぶなどは、物語りの根源が神話学的にどの様に考えられるかは別として、未開民族の間に創造伝説が重視され発達する好例である。

人間は知識的に目ざれば自らと自らをはぐむ世界の起源を考えざるを得ないのである。古代世界の各地に生れた文化圏に殆ど例外なく創造伝説が見られるのはそのためである。エジプト、ハッティ、メソポタミア、インド、中国など、

形の差こそあれ、いずれも創造伝説の持主である。わが国の古事記・日本紀もこれらと並ぶものであり、ギリシア・ローマの神話も哲学も文学も創造観なくしては考えられない。これらのうち最も古いものはメソポタミアのスメルスの伝説である。その楔形文字資料で紀元前2000年頃とされるものに、創造主エンリル Enlil の命によって活動する知恵とたくみの神エンキ Enki の物語りなどがある。これらに用いられている文字の発明以前、即ち紀元前数千年の昔からこのような口頭伝説があったと推察される。

聖書も書出しから創造について語る。事実上聖書も古代に於いて書かれた文献の一つであるから、古代の背景に照して見ればはじめてその意味が明らかになる。聖書の語句が元来ヘブライ語やギリシア語で書かれており、その意味が聖書外のヘブライ、ギリシア等の文献によって明らかになるように、広義の文法としての古代の思想世界を見渡せば、聖書の思想の意味が理解され、何故聖書が古代の他の文献とは違って今日も発言権を有するか、即ち聖書の特異性は何か明らかになって来る。これは創造の問題について殊に然りである。

さて、聖書に於ける創造は創世記のはじめに重要な位置を占めており、それは形も内容も創造伝説として古代文化史上すぐれたものであり、諸文化圏の多神教的偶像教的な伝説とはちがってただ一人の見えざる神の崇高荘大な聖業が描かれるのであるが、その真の把握のためには創世記のはじめを孤立させてはならない。即ち、第一には創世記のはじめの数章は異なった資料が合さっているからそれをほごして創造以後の部分も含めた各々の資料の性格を明らかにする必要がある。第二には聖書は旧約新約を通じて創造に度々触れているから、聖書全体の総合的観察によってはじめて聖書に於ける創造の意味が理解されることを忘れてはならない。

創世2：4から創造の記事があらたまってアダムとエバの罪による楽園追放で一段落するが、これは1-2：3が祭司(P)資料であるのとは別のヤハウィスト(J)資料で、この方が素朴である。創造の記事について、最初の殺人者カインの話(4章)、洪水による悪人の滅亡(6章以下)、神と等しくなろうとする人間がバベルの塔を建設出来なかった物語(11章)等所謂始源史(創世1-11章)の中

でのヤハウィスト資料は人間の罪を中心に種々な出来事を解釈して叙述している。カイン、洪水、バベルはいずれも歴史的な事件を人間の罪を元にして説明したものである。洪水が太古にあったことは考古学的に立証され、ギルガメシュの叙事詩などスメルスの資料も洪水伝説を含んでいるが、悪人が亡びて義人ノアと一族が救われたというのは聖書独特である。バベルの塔も古代の大建築ツグラトの史実を背景とするが、人間の罪のゆえにことばが乱されて塔が出来なかったという解釈は聖書だけのものである。これらと並んで、労働のきびしさ、出産の苦しみという人生の現実を直視し、それは本来エデンの園で神とともに歩むものであった祖先が罪を犯したゆえと説明されることに首肯せねばならない。そこに蛇など神話的要素があるけれども、蛇が沙漠を漂浪するテント生活者であったヘブライ人にとって悪い動物であったこと、古代人の思想には動物の介人があったことなどを考慮すれば、局外者が甘言をもって先づ女性に悪を働きかけ、それが男性に波及するという人生の悲劇がヤハウィストによって如実に描かれているといえよう。書き方は古代の神話の形である。それは形式論理ではわり切れない。誘惑した蛇が神に地にはえといわれたとあるから、誘惑する前は立っていたとするか如きは神話の意味を解しない人の考え方である。さて、このように史実と現実の悲劇を人間の罪を中心に描いたのであるが、その罪は思索によって抽象的に結論された人間の倫理的欠陥ではない。古代世界の諸強国の指導階級に圧迫されたヘブライ人の苦難のうちに示された人間性の弱さと真剣に取組んだ歴史観現実観である。そこに義に在す神の前にひれ伏す罪人の姿がある。

それゆえにこそ、ヤハウィストの始源史に神の救いと護りがあらわれているのである。楽園追放はアダムとエバを殺さず、カインが殺されぬようにと神はしるしを与え(4：15)、洪水伝説は全人類の滅亡でなく義人ノアと一族の救いと繁栄を強調する等である。この救いの理解は、自らが苦しみ、その苦しみから神によって救われてはじめて可能である。救いという体験から過去の救いの事実への回顧が行われてそこに救いの歴史が書かれはじめる。聖書ではこの立場で歴史のはじまりとしての創造が描かれているのである(以下次号)。

書齋だより ○世田谷城趾と聖徳寺の森に上る初日の光のぞきこむ原稿用紙に今年最初の文字をゆくりとするしながら聖書愛読創刊号の用意をする。本当にお正月らしい新しさである。創造の記事を学んで、光あれといわれた全能の主に、イエスの御名によって祈り得る身の幸福を思う。光あれとは今ここにわたくしに呼びかけられているのだ(1月1日)。

○浅間山麓の一夜は明け、雄大な佐久平を見下しながら小諸への道を急ぐ。昨年来の病床に小山英助翁を見舞ったところ、88才とは見えぬ元気で床の上で起上られた。聖書を差出されたのでヨハネ9章を読んで共に祈る。本道に生きる人の姿に接したと思う。10時からの小諸の集いには遠く信越国境や南佐久からの来客者あり、静かな、しかし力強い新春第一日曜であった(1月5日)。

○振替の通知票になつかしい筆跡があったのに眼をひかれる。祝御新刊と塚本先生のお名前で雑誌代が送られて来たのであった。目がしらが熱くなる。この頃御気分の良い時、附添の方二人に支えられて庭先に出られたこともあり、枕元には本もお置きのこと。静かないクリスマスと新年だとお家の方々からうかがったのは得も押しつまった頃であった。何年も前から雑誌を出すようおすすめていただいていたことが思い出される(1月10日)。

○編友学園での日曜聖書講座も無事にはじまった(1月12日)。

○大阪の黒崎先生から、「いいよい月刊誌に御立上りの由、祝福を祈ります。にはじまりウンと御奮斗を祈上げます」に終る温いお便りに接した。御期待には添えそうもないが、後進講席の御好意には感謝のほかない。全国各地から敬語や申込みが来つつある。筆は重い。今まで知らなかった新しい宇宙に発射されるような気持ち(1月15日)。

○大阪内村先生記念講演会、2月9日(日)1時半、大阪 YMCA (西区江戸堀北通二丁目)、講師黒崎幸吉、鈴木俊郎、高橋三郎。

○三谷隆正先生20周年記念講演会、2月16日(日)1時半、東京 YWCA (神田駿河台) 講師山田幸三郎、藤木正高、高橋二郎、司会中川昌輝。

○東京内村先生記念講演会、3月28日(土)29日(日)の予定、詳細次号。

○前田護郎著 新約聖書概説(岩波全書)、ことばと聖書(岩波書店)、若き日の欧州記(学生社新書)はなるべく最寄りの書店へ。

月刊(毎月15日発行)定価(送料別)1部40円 6ヶ月200円 1年480円 外国1年600円

発行所 東京都世田谷区赤堤町1の227 聖書愛読社

振替口座 東京 335番 発行所前田護子